

室生犀星

正宗白鳥論



# 正宗白鳥論



## 一

正宗白鳥はもはや国宝的な作家ではなからうか、老大家の最年長者でありぴんぴんして、支那の小馬のように強健敏活である。老体はどうあろうとも書くものにもだまだあえぎはない、耳も心臓も腕っ節も達者である。気障<sup>きざ</sup>なところ気取ったようなもの、思わせ振りや知ったかぶりなぞ微塵もない、何時でも正宗白鳥は正宗白鳥ま

る出しである、深く信じてよい。嘘やはったりやお世辞はおきらいである。

自分に必要な人間ならば会うが自分にとって何にもならない無駄な人間は、頭からうけつけない、写真取りとか遊び半分の訪問者には無愛想で早く帰ってくれというお顔をなさる。

だから身だしなみは洋服や帽子にも着方かぶり方に少しの頓着はなく、時にはご愛嬌に見える時もある。

軽井沢から上京すると新聞社や雑誌社にあらわれ、知り合いの記者と雑談をしその人と無邪気に散歩をする。

観劇、映画見物何でもござれである。ちつとも面白くないようなお顔でいながら見るものは見て置き、読まねばならないものは素早く読んでしまおう、読めば蚤のすべったことでも見遁みのがさない人である。そして批評紹介のような雑文を書かれるが、卓抜嶄新な意見もなければ特に鋭角な識見もない、実に当り前のことを当り前にかかれる人である。

その当り前が他人にはわすられている当り前の精分みたいなものを持ちちらちらとお見せになる。文化勲章をもらったときに新聞記者はこれからも仕事をなさるかどうか

と聞くと、書かなければ食えないから書きますよと、一等うまいところをひねってあつと言わせる、それは咄嗟とつさに一言で片付けるものをいつも持ち合しているからである。

当り前のことを当り前にいって当り前でない標的を射るのである。くせ者でも横着者でもない。正直一凶な、わが正宗白鳥は水晶のような透きとおったお人なのである。

徳田秋声はちよつと気取りのある、考えてからじつく



りともものをいう人であった。そこに老いた時間があった。正宗白鳥はしゃべり出すと一どきに息もつかずにおしゃべりになる、平常孤独でいてしゃべらない人はある短い時間のうちでみんな一遍にしゃべってしまいうものである。何でも知っているし何でもはなすことに、取って置きなぞはしない、驚いたことにはわが正宗白鳥は入歯のことで、歯はあるだけ抜歯してから総入歯にした方がよい、ちびちび一二本ずつ抜いて入歯をしては最後にまたやり直さなければならぬという卓見をある時言われた。

原稿料でも印税のことでもすっかりお話をなさる。徳田秋声にはあなたは幾ら取っているんですとはいえない私は、正宗白鳥の前ではそれをすらすらといえる、正宗白鳥はそれをすらすらという人である。

何処にもくらいところも陰気さもない、あかるすぎるくらいかげのないお人である。

吉川英治の仕事の行きわたった腕っ節というものを、明治以来の文士の仕事でもめずらしいことだと言い、そのことで正宗白鳥は気持好さそうにほれぼれといわれる

のである。流行小唄だからどうのこうのというが、西条八十の仕事はそれをどんな人にもあたえた感動では、いまになるとやはり立派な仕事の一つであった。そのことでは私は心から西条八十をほめたいが、わが正宗白鳥は吉川英治をほめる意味のひろさを持つことで、実に天真爛漫さがあつた。

正宗白鳥の感動というものの動機はいつも青年的であるし、純粹でむしろ子供っぽいところがある。夏目漱石もいまの年齢から見ると小僧っ子のような気がするといふ正宗白鳥は、どこか、いたずら小僧のようなところも

あつて、この人こそ私なぞ選ぶならこの世の最初の最後の師友とすべき人ではないかと思われた。

小説にはいろいろとするときには正宗白鳥は何時も手ぶらで行き当りばったりでおはいりになる、信長が癩癩を起すと侍女に風呂場で水を打<sup>ぶ</sup>っかけ、上司小剣にもらった鈍刀で猫でも打<sup>ぶ</sup>った斬ろうとお書きになる、そこに何の用意も工風詠嘆もない、そしてこの老大家はさすがに色気に遠いのか、色気を書き分けることができないのか、女というものを溜飲の下がるまで書いたためしがなかつ

た。女がうまくかけないのだ、女のかけない作家が小説で生きようとすることは無理である。そうであるのにわが白鳥はその無理を通して小説で生きていた。ゴツゴツした描写も正宗白鳥がまる出しになるとゴツゴツが生きてくるから妙である。

面白くも可笑しくもない小説が正宗白鳥という人間臭をおびてくると、読者はいやいやで読んでいた頭を引きもどされるのだ。

正宗白鳥は五年とか十年めくらいに、人の気を引きもどして白鳥を見直させるものを書かっていた。戦後の「日

本脱出」がそれだ。そういう五年十年めに立ち直りを見せている波の起伏は、自然にそうなっているものか、勉強をしてそうなったのか、そのどちらでもいい、そしてその間の文芸批評家達が、白鳥のまわりを実に永い間、人を代え批評を反芻はんすうしながらどうどう回りめぐをしていることは、読んで面白くも可笑しくもないという凡庸なご仁でないことがわかるのだ、聡明惨酷な批評家達が引きまわされていた永年の月日は、一たい何のために引きまわされていたのであろうか、一人の女さえうまくも面白くもかけないような小説家の、どこが文学の心臓に引つか

かってそうだったのか。考えて見るがいい。

正宗白鳥の生涯にはただ一つのお祝いの集いも、記念の会ももおおされていらない、青年作家の背景もなければ膝下しつかにあつまる人もいないのである。孤独清潔というさかいはこの人ほどよくあらわしている人はない、いつでもお一人である。そして悪口を叩かれてもそれに反ばくをしないし、笑いもしない、たしかに受けとっていられる、急所をやられるとそれが五年十年めに、ちよつとした立ち直りの動機にまで受けとっていられる、悪口を叩いた奴は依然白鳥のまわりをどうどう回りめぐをしなければ

ならなくなるのだ、作家の恐ろしい批評の受け取りかたは、うけ取っている証拠まで湮滅いんめつしていながら五年十年のあいだにほんの少しずつ変りかたを見せているのだ、だれも徳田秋声にはあまり食ってかからないが、正宗白鳥にはだれかが、一度は食ってかかっていた。

食ってかかられたお人は外方そつぽを向いてだまっていたのだ。作家の根気は無限であろう。

熱海は暖かい、そこに志賀直哉がいた。軽井沢の寒烈な土地に正宗白鳥がいた。志賀直哉は自転車をかいてからまる二年何も書かずにいたが、正宗白鳥は雑文も交え



てたくさんに書いていた。志賀直哉の透明さと正宗白鳥の透明さはしながちがっていないながら、これは二つのたまのようなものである。二羽の鶴。

私がまだ詩の投稿家であったころ正宗白鳥は、昔の早稲田文学に勢いよく書いていられた一大大家であった。一投稿家と大家の距離は未来永劫にまで遠方のようであったが、いまは正宗さんとは十くらいしかちがっていない、十くらいしかちがっていないということは、六十を越えるとすぐ手に近いところに齡のすがたがあるのだ、だから話をしていてもものんびりと話をすることができ

る。どうせ話をしてもバカ半分のことしかいえない私は、正宗さんの前では少々バカなことでも平気でいえる。らかなものであった。

そしていつも感じることはこの老大家はたいせつにしなればならぬということである。

(昭和二十八年十月二十二—二十三日)

二

娘が結婚をするので正宗さんになこうど役をおたのみ

しようかという相談が、娘や息子や妻やむこの青木和夫の間で起った。堀辰雄君は臥ているし夫人も病勢によつては出席不可能かも知れないから、兎も角、正宗さんより外にはなこうどになつて貰う人はいない。おれが行つて頼んで来ようと私は言ったが、息子も、青木和夫も懸念が<sup>こころもと</sup>つてどうかかな、承諾してもらえるかなあと心許ないふうであつた。宴席に出られるのがお厭なら名前だけでもいいんだから、外の事とはちがうし承諾して貰えるさ、と私は彼らの心配するほど気重くは考えてなかつた。青木和夫も二三度はおあいしているし、娘も、息子も、

たびたびではないが戦時中には何彼なにかと物の買入れなどで夫人としたしくしていた。正宗さんはそんな時にも滅多に話の中に加わるといふことがないそうであつたが、戦時中の交際というものにはそれ自身に外の場合とちがう内身うちみな感じがあるものだから、話を持ちこんでも断られることがあるまいと考えていた。

その日にすぐ正宗さんをお訪ねして話をすると、私は殊更になこうど役を正面から切り出しもしない世間話のなかに含み込ませて、式も軽井沢で挙げ諸事簡単にやるつもりだと言つたが、有耶無耶うやむやの間にどうやら正宗さん

は話が解ったらしく、若しご都合がお悪いようだったら出席していたただかなくともいいんですと遠慮していうと、旅館は近くではあり暇もあるから出ますよと、もう話が決められて了<sup>しま</sup>ったように承諾してもらえた。ぷつぷつりと一言しかいわないような私の言葉の先を呑み込んだような正宗さんは、それだけの要談で娘の年齢とか対<sup>あいて</sup>手の男が何をしているかも聞くでもなかつた。そんなことを聞いても何もならないし、あるいは何か解ることは解っているのかも知れなかつた。

おなじ土地の旅館で式を挙げたが、なこうど役という

ものは末座にすわるようになっていから、正宗さんは先生は此方こちらへとあんないする女中の言葉に、一番末座にきゆうくつそうなフロツク姿を四角にたたみこむように坐られた。煙草をさし上げるようにいうと、いや別に喫のみたくもないんだがといわれながら急に喫すわれた。べつに気取るとか上るとか気をもむふうもなく、普段とおなじいふうで顔をいつも正面に向けていられた。この人は顔の姿勢のいい人だ。いつだって横を向いていないと私は機嫌好く、何処か石のようなものの雑まじっているような体付きを眺めた。間もなく席が柔らかくなって来てから

正宗さんは堀夫人と本の話なぞされたが、これも、普段とかわりがなかった。対手がらくな連中だから気骨が折れないでいられる。そんなふうにも私は見ていた。式が済むと一人でこつこつと冬の日の往還をかえって行かれるのを、私たちは旅館の玄関まで見送りに立った。肩の上ったフロツクの背後姿は正宗白鳥の感じであるよりも、普通の田舎人の感じであった。

万端を終えて挨拶に上ろうとしながら、ともかくも青木と娘とお礼の言葉をのべに出したが、私はぐず付いて出かけられなかった。お頼みに上ったりお礼に行った

りすれば二度も邪魔をすることになる、あの方方は行かない方が邪魔は一度だけで済むことになるという私の流儀で、とうとう冬にはいってもお礼に上らなかつたのである。正宗さんは他人と愉しく話をされることはない、五分か十分くらい勢い込んで、次は、ぷつぷつと黙りこんでしまう。孤独な人間は自分でいいたいことを言ってしまうと、相手の坐っているのを見るのさえ邪魔なものである。私の平常の極端なそれが正宗さんにたくさんにあるので、私は二度お訪ねするところを一度にして正宗さんの肩を軽くしたのである。迷惑な話の



つづきを、二度までしたらたまらないからであった。

宴会などでは正宗さんはなかなか機嫌が良い、座談会で一度だけ同席したことがあるがこれも機嫌が良い、正宗さんもたまにたまった話の捌はけ口ぐちのいる方である、それだから上京して人と話をされ座談会にも出られる。まだ、つとめる気のある方だ、どこまでもいやなら厭を言いとおす方ではない。私はこのごろどんな事情があつても厭なら厭を打ちとおすようにしていた、六十までがまんしていた他人へのつとめる気が全然なくなり、それをまだ遣っていたら一生をむだにつとめたことになり、何

のために文学の仕事の放埒ほうちやうさを選んだかすら判らなくなるので、いやならいやでかぶりを振りとおすのである。正宗さんは平然として雑誌社の応接間にお通りになる、軽井沢の唐松の林の中にいられたことは嘘のように埃とゴミの街でも歩いていられる。文学の話も入念な読書によつて頭はつかれていない、ぶつ切ら棒の小説がぶつきら棒のまま味があつて読める、俗物のはらわたもたくさんお持ちになつていられるし、その俗物を趁おい出すこともしないし気付かない間にそれらを役立てている、油断のならない方ではなく、相手の油断しているあいだに何

時の間にか何かを考え当てている人だ、ふるい立つことはしなくとも何か積み上げたものを機会があると見せる方である。たくさん小判をしまっていられながらそんな顔はしない、その筈であろう、小判ですら苦虫を噛み潰つぶしながらたまたまったものであろう、しかし正宗さんも書くことを与えずに軽井沢の雨の中に打う棄ちり出して置いたら、宝は持ち腐れになり先生の手は薪をへし折るのにボロのようになってしまったであらう。私の二度とも同席した座談会では相当な作家がその会合に、一人あてずつ、何かの議論のついでに正宗さんに議論を吹きかけるよう

にくい下がっていたが、ちよつと生真面目な顔をされたきり後は平然とあしらい、あしらうにも殊更にあしらうというふうではなかった。座談会などでは、どうしても平常の正宗さんの噂や冷淡冷情というようなものを早呑みこみしている人は、一応、礼儀のように正宗さんに当ってゆくようであるがそれも私などなら嚇かつとして掴みかかるように罵ののり返すが、正宗さんはこの人がと思うくらい控え目にあしろうていられた。相手のいうことなぞ不愉快な場合には聞いていられないのかも知れない、そんな点で正宗さんは隙だらけの人で、斬り込めばかなら

ず斬り込めるゆとりとぽかんとした穴をあけている方だった。

戦時中、正宗さんのお宅にも、質の悪いやみやが行ったであろうが、そのやみやの幾人も私の家にも出入りしていて、正宗さんに頻々ひんぴんと行く話をし、評判が宜かった。きっと夫人をうまく口ぐるまに乗せるようなことをいったであろうが、正宗さんという人はそんな手合にだまされそうに見えていて、いざとなると、くるつと此方向きになって一言で叩き切ってしまう人ではないかと思っただ。戦時中は夫人がひと方ならぬ程苦勞されていて、い

やな買出しとか物の交渉とかを一手に引き受けていられた。戦時中の冬は厳しく、ことさらに寒気が続いていたが、夫人は、何時も手袋を二重にはめ、かみは雪にぬれ自転車の輪はかちかちに氷る街路で、きょうも正宗の奥さんにおあいしたとか、きのうもお買物の順番を俟<sup>ま</sup>っていた。私のお息子どもはいつていた。汽車で行く処は勿論、近在の百姓家にも食糧のことですじじゅう出向いていられた。恐らく夫人の労苦がなかったら正宗さんも困られ、どんなふうに困難な日がつづいたか想像に余りある。正宗さんは買出しも何も出来る方ではない、この

点は私と似ている。君の家には若い人がいるから働いてくれるのでいいが、僕の家では若い者がいないんだと何日か言われたが、だから夫人はこの若い者の役をつとめていられたのである。まるで乞食のように頭を下げることもございますからね、と、夫人は何かの折に話された。その時分から鶏を飼い、羊を飼い、馬鈴薯、そば、花豆、葱というような野菜類を正宗さんや夫人の三四倍も手にあまる程たくさんに作られた。勿論、人も雇うたりされているらしかったが、それらはやはり百姓家からの買出しの不愉快さや高価な物を買わないためであった

ろうが、一つは正宗さんの孤独から割り出して形にあらわれたものの一つとして見た方がいい。自分の手で出来るなら野菜でも作り、他の方面を煩さないようにしたい望みを持たれたらしい、夏が来て馬鈴薯は出来るし花豆は莢さやをはじめた、それを折柄訪ねた私に少々お頒わけしませうかと、夫人は労苦の豆を私に分けられた。おれの家では風呂だけは毎日立てるといわれた正宗さんは、風呂でも立てなかったら、土の垢ほたや櫛ほたのゴミは七十歳の荒い指紋の皺からすぐには、洗いおとされなかったであるう、暑い日でも、正宗さんと夫人はそのようにして畑に



出られた。機嫌が悪くなることは当り前だった。青木和夫がたのまれて写真を撮りに行くと頭から叱られた。

「この老人の写真を撮ってどうする気なんだ。」

そして数日後夫人の依頼で子供さんのものを一枚撮って上げると、正宗さんはおれのも撮ったっていいと思いがけなく例の正面を向いた顔を機嫌好く撮うさせた。その前にすげなく叱り飛ばすように断った写真のことが、この間はああ言ったがきようは撮る気になっっているから撮りたまえと言わんばかりに和々した風景だった。正宗さんは実にそんなところのある人である。

正宗さんと私の家は軽井沢でも、二十五分くらいかかる道のりだったが、戦時中、新聞は配達してくれないので販売店まで取りに行かなければならなかった。私の家からは近くであつたが、正宗さんのお宅からは浅間下ろしの吹きさらしになっている長い街道を行かなければならず、その街道の冬は遮こえぎるものがないから、寒さは想像外のものだった。正宗さんは毎朝防空頭巾を深々とかむって、新聞を朝ごとに取りに行かれた。なかなか大変でしょうという運動になるから大したことはない、と、それがどんなに寒くともそう問たずねられると平気な顔付を

して見せられる人であった。一年に二度くらいお訪ねするのにも道のりがあるので面倒がる私にくらべると、足もお達者らしかった。氷点下七八度の吹きさらしの道路を歩いていて寒くない訳がない、正宗さんは無理にも弱音は吐かない人だ、防空頭巾といえればそれをかむって歩いていられるものだから、或る時、家で通いの縫物婆さんを雇っていて仕事をさせていると、そこに正宗さんが見えたので婆さんは驚いて、いまお宅に見えた方は一たい何をしている方でしょうか、と彼女は敢てたずねて素性の分らない一老爺の身元をたずね、そこで人がらを説

明するとそんなに名のある方だとは思わなかった、宅の前を変な恰好をして毎日新聞を取りに行かれるものだから、何処で何をしている人かと皆で噂していたんですよ、そうですか、こちらの先生のようなお仕事で先生の先生のような方ですかと、婆さんは惘あきれたふうであった。こういう不思議な思いをしていた人は軽井沢ではどれだけいたか分らない、こういう点でも、どこかに隠しきれない尊敬をにじませる人である。身綺麗にきちんとした人よりも何処かに構わないところのある人というものは親しいものだ、正宗さんは一しきりは風呂も煮物も手伝っ

ていられたようであるが、そんなことを一度もしたことのない人で戦争中には、世の常人のように働いていられたから人間はいざとなると役に立たない人も役立つことがあるものである。下ろし立ての紺の昔出来の佐野屋あたりの足袋をはいて、平気で泥仕事をされることもあったらしい、頓着のない人はそれで済むらしく、鶏や羊や畑の物や原稿の中でも平気であち行きこち行きしながら、それらも何時の間にか整理されてゆくから妙だ、忙しいには忙しいだろうが正宗さんには気になることがたくさんあっても、そのうちの幾つかは忘れているらしく、だ

から頭の毒になるようなことがないのである。

部屋だか応接間だか仕事場だか分らないところに通されても、灰皿もマッチも腰を下ろす椅子もがたつとも動かせなかった。部屋じゅうが荷物やらがらくた物で椅子がうごかないのである。嘘のような話である。そんな応接間では客は立っていないなければならなかった。坐っても膝を入れる余地がない。正宗さんをたずねたことのある人はこれには一等まいるだろうし、永く印象にのこるわけだ、ここに現われる御主人はやっとマッチとタバコとを持って出られるが、灰皿はそばにあるストーブを使う

より外はない、直立ばかりしてられないから腰を下ろしても、きゆうくつでしようとも何ともいわない、愉しい話なぞそんなところで出来るものではない、正宗さんの顔はすぐ真近くにある、あんまり人間は顔と顔とを近づけていると、それが気になって私のような人間は話がゆっくり出来なくてこまるのだ、御主人はそんな気づかないなぞしないで初めむんずりとし、次に少し話し、その次にはやたらに矢継早にしゃべってから、又むんずりする、けれども正宗さんの一等よいところは笑顔である。それは温かい心からの笑顔で少しのいやみもない、童わらべ

のごとき笑顔である。凡て笑顔すべというものは男の場合、笑わない方がよほど立派なのに、笑って顔かたちの崩れる人が多い。で正宗さんの笑顔は天衣無縫で無邪気で無条件に賛成出来る笑顔なのである。

だいぶ以前といっても、もう、かれこれ十三四年も前のことである。徳田さんが軽井沢に見えられ一緒に正宗さんをお訪ねしたことがあった。恰度ちやうど、お昼すこし過ぎた頃だったが、露台で徳田さんと私はしばらく待たされた。徳田さんは、「正宗はいま昼寝をしているんですよ。」と言われ、出て来た正宗さんは昼寝から無理に起された



ような、にこりともしない不機嫌振りであった。徳田さんは身辺に若い女性がいたりしていた最中だったのか、それとも、軽井沢に旅をしに来られたせいか、どこか遠慮深げで両雄はむしろ気むつかしげにぽつりぽつりと話されていた。何を話し合ったかわすれて了ったが、果物とか菓子とかが出ていて雲場ヶ原の上台にある山荘の昼は深くた闌け、どこか、お二人の様子とも含みあわせて或るすごみのある光景であった。その日ほど私は正宗さんの不機嫌つづきの顔を見たことがなかった。五十代の終りだったから意気もあが昂っていたかも知れない。

徳田さんはかえりにいわれた。

「正宗は何も構わんが奥さんが気が利く方だからね。」  
正宗さんは家が焼けたことを折々口にせられた。まだ石炭もあつたしピアノも焼いてしまった、と、いうふう  
に確かに二三度も、口にせられた。あれほどの人物が家の  
のことにこだわっているのを、私はそれは正宗さんが風  
流人でないから、あとにみれんが残るのだ。裸で軽井沢  
に疎開した私は五年間一度も上京もしないし、家のこと  
はどうでもよいと考える何も彼も投げ出した形だった、  
それを、風流人の魂がそうさせるのだという解釈をして

いた。実際、風流人はさっぱりとあきらめることは諦め、何事も、運命のことでも口にはしないのである。サムライはカタナに物をいわせたものらしいが、風流人は精神だけでがまんの勉強をしつづけているから、一旦、あきらめるとどんなに底に突き込まれていても、弱音を吐かない人間どもである。風流ということとは茶や花をいじくるように言う雑魚ざこどもの議論とはちがって、何でも自分のなかに畳みこんで凝じ乎っと忍耐する者のことだ、多分、正宗さんはまだ俗物の魂がたくさんあるので、あんなに物惜しみされるのであろう。風流人だったらあんなに言

われないであろう、石炭なんかどんなに沢山にあっても、石炭が食べられるわけではなからうと、そういうふうには私は考えていた。そして終戦後、上京して落着いてみると家のあること、焼かれないことが熟々つくづく便利調法であることを知ったが、依然、それがどうなっても、たかが人間の一生でどちらに廻っても、また建てたり作ったりすればいいではないかという考えが、私の心に根をもっていた。どうせ焼けるなら庭だけでも目じるしになればいいと、私は石をそのままにして置いた。五本の石燈籠に塔、桶人、石仏、その他の石どもが美しく廃墟のなかに

立つことを考えて、私は安心して庭を去って信州に赴いた。こんな場合にもこんな空想めいたことを考える私なぞは、全く正宗さんの一笑どころか憫笑びんしやうに値するところであるかも知れない、君のいう風流人というのはこんな変な子供くさい莫迦ばか々々かしいものかねと言われるかも知れない、そしてそれに全く相違ないものであった。

つまり正宗さんの印象というものは、凡て特異なものに見られるふうに出来るから、何でも正宗さんのことから書いて見て、それが常人と変って見えてくるから不思議である。常人と何も変ったところのない人が本来であ

ろうに、それが文学というものを背景に持ち、またその内側に立っていられるからそう見えるのである。

(初出不詳)







日本文学電子図書館

---

正宗白鳥論

著 者：室生犀星

制作者：宮澤一郎

底 本：現代日本文學大系16 正宗白鳥集  
筑摩書房

昭和44年7月15日 初版第一刷発行

日本文学電子図書館